

## 学位論文要旨

### 後期中世アラゴン王国の「パウロの身体」

桜井寛彰

歴史記述は各時代の社会情勢に制約され、各時代のパラダイムとも連動してきていた。20世紀の歴史記述も政治経済史から社会経済史へ、意思決定集団の歴史から民衆の歴史へという大きな流れが存在していた。そのため、今日の歴史記述では史料に書き残されている多くの情報の中でも、今日の基準で「社会的」としている情報を万遍なく把握していくことに終始してきている。しかし、過去の意思決定集団が判断・行動していく際に拠り所とした要因は、今日の基準で「社会的」としている全体像に基いていたとは限らず、むしろ、当時の意思決定集団の間で支配的であった思想など（例えば、千年至福説）に基いていた。そして、当時の意思決定集団の間で影響力を持った思想の痕跡は、構築された社会の枠組みとして後の時代に残されていくことになった。

20世紀前半までの西洋史研究においては、ギリシャ・ローマの古典に依存した分析軸による歴史記述が盛んであった。それに代わって、20世紀後半以降、現在に到るまで、ユダヤ・キリスト・イスラムの差異を使った分析軸による歴史記述が優勢となってきている。この分析軸の転換は、従来「近代のはじまり」とされてきた16世紀直前の後期中世スペインという場に設定した研究においても起きていた。20世紀前半までの後期中世スペイン史は、主に古代ローマの歴史像と深く結び付いた側面から研究されてきていたが、20世紀後半以降、主にキリスト・ムスリム・ユダヤの三宗教集団間の合従連衡の側面から研究されてきている。しかし、この20世紀半ばの研究パラダイムの転換は、三つの集団（キリスト・ムスリム・ユダヤ）として王国内部を相対化してきた反面で、王国内に限定された閉じた世界として設定され、外部からの流入を考慮しないという限界も作り出してきた。

盛期中世以降に西欧の強大化していく王権の中枢には、塵から生じた「新しい人」と記された背景の繋がりが見え難い集団が現れてきていたが、後期中世以降のスペインにおいても「改宗者」や「新キリスト教徒」などと記された新しい集団は王国の意思決定において中心的な役割を担っていた。これらの「改宗者」や「新キリスト教徒」などと記された集団は、従来の研究では、全て王国内に元々存在していたユダヤ教徒がキリスト教へ改宗した集団であるとされてきていた。そのため、後にイベリア半島から北西ヨーロッパや地球上の海洋に広がっていった「新キリスト教徒」に関する研究においても、元ユダヤ人であったことを既成事実として現在議論されてきている。こうした既存の研究に対して本稿では、西欧に出現した「新しい人」を把握していくには、王国の外部から移動してきた要素、特に1054年の東西教会分裂期にまで溯って、西欧に移動した東地中海出身者を考察していく必要があることを示していった。そして、このことは20世紀前半の分析軸であったギリシャ・ローマ基準に多少立ち戻ることともなるが、現在のユダヤ・キリスト・イスラムの範疇にとらわ

れている歴史記述では見え難くなっている意思決定の中枢部を明らかにしていくことができるだけでなく、現在の多文化主義の下では、以前は普遍化されて弊害も生んできたギリシャ・ローマの基準自体を相対化していくことができると私は考えた。

中世イベリア半島は東方からヘレニズム・ローマの遺産を継承していた。特に、本稿で取り上げた後期中世のアラゴン王国はシチリアからギリシャにまで領域を拡大し、ヘレニズム・ローマの遺産を直接受容していた。当時の東地中海からアラゴン王国への移住者は、王国全体の人口に占める割合は小さかったにもかかわらず、宮廷に出入りしていた人々に直接保護されていたため、宮廷と関わりを持ちながら意思決定に影響を与えていくことになった。

従来の分析方法では、キリスト・ムスリム・ユダヤという範疇にとらわれて、単純に三つの集団として括られてきていたが、当時のアラゴン王国の史料上には、誤認された者も含めて黒海・東地中海の多様な人々の存在を裏付ける痕跡が残されていた。例えば、キリスト教徒は単一の固定化した社会を構成していたかのように従来議論されてきていたが、東西キリスト教会の分裂以降の西方のラテン・キリスト教世界における東方出身の正教徒などの位置付けは明確にされてきていなかった。また、以前の異端研究などにおいては東方との関わりも探求されてきていたが、実際には東方で単に正教徒であった者が西方のラテン世界で二元論の異端者としての烙印を押されたり、その一方で当時のローマ教皇が正統派信仰として採用していた基準自体にも東方の正教と同じ基準が採用されていた。このように、中世アラゴン王国のキリスト教徒は、従来前提とされてきたように一つの範疇に属していた集団として固定化していくことはできなかった。当時のムスリムの範疇にもずれや誤解が生じていた。「サラセン Saracen」という言葉自体、「日の出の民」や「異教徒」などの原義であったにも関わらず、現在の中世スペイン史研究では一様に「ムスリム」として解釈されてきている。しかし、当時のアラゴン王国の行政上の分類である「サラセン人」の地位としての税の徴税対象者の中にも、ギリシャ人や改宗者などが含まれていたように、東地中海出身者はサラセンの範疇に含まれていた。そして、ユダヤ人の範疇も東方出身者を含んでいた。例えば、アラゴン王国のバイイを歴任したサラゴサのユダヤ人の家系はコンスタンチノーブルに由来していたし、また、ユダヤ人に対する税にも、ユダヤ教徒のみではなく、徴税対象者としてタタール人や異教徒が含まれていた。以上のように、東地中海出身者は三つの範疇間に跨って存在していた。

「ユダヤ人の改宗」という説法自体も東地中海と密接に関係していた。従来の研究では、アラゴン王国で1391年に起きた暴動は「ユダヤ人の強制改宗」を引き起こし、三つの社会の均衡を崩して社会が変化していく節目になったと説明されてきていた。そのため、この暴動はユダヤ・キリスト教の集団間の対立としての社会的な側面などから考察されてきていた。しかし、中世の「ユダヤ人の強制改宗」は、ビザンツ帝国の模倣の一環、あるいは、ユダヤ教徒がヘレニズム化して偶像崇拜に陥る強制改宗を拒んだ殉教、あるいは、千年至福説による終末前の準備段階として起きた出来事としても解釈していくことができた。この何れの場合もヘレニズムの基準の導入によって集団間の差異が強調さ

れていったように、1391年の暴動とそれに伴う強制改宗もまた、東地中海起源の終末論に基いたものであり、さらに、当時の「強制改宗」を拒んだ殉教はヘレニズム化に対する抵抗であった。

また、14世紀末のアラゴン王国内では、「ユダヤ人の改宗」と同様に「ギリシャ人の解放」が頻繁に起きていたが、当時の史料上の改宗者と解放奴隷は重複していた。東地中海との関係が密になる14世紀半ば以降のアラゴン王国では、東地中海からの移住者は増加し、ヘレニズム・ローマの遺産が王国内で浸透したことで、「ユダヤ人の改宗」と同様に「ギリシャ人の解放」はヘレニズム・ローマの基準で実効性を持ちはじめていた。アラゴン王国の宮廷は、寄進行為としてギリシャ人、ハンガリー人、アルメニア人などを解放していたが、この寄進行為はローマ帝国からビザンツに継承されていた古代ローマ人によるギリシャ人奴隷との絆を緩めて解放した行為に由来していた。このように、当時のアラゴン王国はビザンツの伝統を継承し、東地中海の多様な要素を受容していた。

このことから、従来の研究でユダヤ・キリスト教間の差異が強調されてきた「キリストの身体」というキリストの実在する領域は、「パウロの身体」、即ち、西方で（キリストと同時代の）ギリシャ・ローマの実在する領域としても捉え直すことができた。使徒パウロは「ユダヤ人もギリシャ人もない、奴隷も自由人もない、男も女もない、キリストの下に全て一つである（Galatians 3:27-28）」という一説を残していたが、使徒パウロの提示したこのキリストの身体の枠組みへの統合は、上述の「ユダヤ人の改宗」と「ギリシャ人の解放」という二本の柱によって、多様性を包摂していく装置としても機能していくことになった。この「パウロの身体」の提示したヘレニズム・ローマの活きた規範は、当時の社会の様々な領域における秩序の手本として模倣されていった。1391年以降のアラゴン王国で、「ユダヤ人の改宗」と「ギリシャ人の解放」が同時に起きた結果として「パウロの身体」を髣髴させる結社が誕生していた。大天使ミカエル、聖パウロ、三位一体、聖クリストバルなどの名を与えられた「ユダヤ人の改宗者」の結社は、当時、神格化した存在となっていたアラゴン王から特許状を与えられていた。そして、これらの結社に属していた改宗者は、絹織物、製本業、書物の販売、あるいは、地図や航海図の作成などの当時のアラゴン王国では新興の業種に就いていた。こうした改宗者の中には宮廷に出入りしていた人々の間を取り成す仕事、あるいは、行政官に就いていた者もいた。また、当時のアラゴン王はギリシャ人に加えてアルメニア人、アルバニア人、ブルガリア人、ロシア人などの東地中海や黒海沿岸出身者を次々と解放していたが、解放されたギリシャ人、キルキア人、トルコ人、ロシア人などは、聖ニコラス、聖ジョルディ、聖霊の結社で保護されていた。当時のアラゴン王国のギリシャ人やタタール人は、銀細工や弓矢などの職人、医師、彫刻や祭壇画などの製作者となっていた。さらに、王に特別に保護された改宗者や東方出身者は、宣教師、聖職者、巡礼者、新興商人などとなっていた。当時の宮廷の肥大化には、こうした使徒パウロに則って模範を示した「新しい人」の果たした役割は大きかった。

また、当時のアラゴン王権の神格化も、ヘレニズム・ローマの側面から考察していくことができた。古代末期のローマ皇帝たちの神格化を支えた思想はストア派の哲学者たちの思想であったが、14世紀末のアラゴン王もこうした古代のストア派の作品を所蔵して、自ら神格化していた。そして、終末論の影響を受けていた王宮聴罪師フランセスコ・エヒメニスは、暴動後の1392年に、後に神格化したアラゴン王となる皇太子マルティに「公国の統治」の書物を渡していた。このフランセスコ・エヒメニスは、都市や都市住民に対して好意的であり、重商主義とともれる都市の通商重視の政策を説いていたが、当時の東地中海の先進的な都市文化は、神格化した王に保護されて宮廷に出入りしていた「改宗者」や「解放奴隷」によってもたらされていた。神格化した王の下で、当時急速に集権化していった王の統治機構も、地中海起源の統治制度であった。代理王（総督：virrey 西語、viceroi 英語）は、アラゴン王国のアテネ支配に起源を持った制度であり、監査主任 maestre racional はアラゴン王国のシチリア併合後に現れる制度であった。そして、こうした制度は、後のフェリペ2世の治世に古代ローマ帝国の統治機構の復活を準備していくことになった。

中世の間、東地中海を中心に保存されていたヘレニズム・ローマの遺産は、後期中世以降、西地中海にその比重を傾けてきていた。そして、アラゴン王国は地中海から古代の遺産を西方へ移転させていく際の一つの通過点となり、「パウロの身体」はヘレニズム・ローマの遺産を西方のスペインで復活させていく際の媒体となっていた。つまり、「パウロの身体」はアラゴン王国で「新しい人」を生み出して、王の周辺の宮廷の肥大化、そして、王の統治機構の変化へと導いていった。

1492年のコロンブスの航海以降、イベリア半島のスペイン・ポルトガルは、地球の一体化を促進していく先駆的な役割を担ったとして従来説明されてきていた。しかし、この15世紀末以降突然、アメリカ大陸や地球上の海洋へと拡大していくことになるイベリア半島にその直前まで蓄えられていた本質は、中世スペイン・ポルトガルの遺産ではなく、あるいは、中世スペインのユダヤ教やイスラムの遺産でもなかった。イベリアの拡大の源泉の本質は、地中海に蓄えられてきていたヘレニズム・ローマの遺産そのものであった。1492年にスペインで起きた出来事の中でも、現在の研究では「ムスリム」勢力の最後の砦のグラナダの陥落や「ユダヤ人」の追放といった当時のスペイン内部の要因が強調されてきている反面、当時のスペインに東地中海からもたらされた外部要因との関係には関心が向けられてこなかった。この従来限定されてきていた考察対象を拡張していく端緒として、本研究は位置付けていくことができるだろう。つまり、15世紀末以降のアメリカ大陸や地球上の海洋への拡大の要因は、考察対象を中世のイベリア半島やイタリアに留めていくのではなく、更に一步溯って中世東地中海に蓄えられたヘレニズム・ローマの遺産にまで考察対象を広げていく必要がある。そして、このことは「地理上の発見」や「ルネサンス」などによって従来の西欧史で「近代のはじまり」として設定され、普遍化されてきた「近代」という対象を、ヘレニズム・ローマの側面から解析していくことによって相対化して把握していくことに他ならないであろう。この解析の際の一つの重要な枠組みとして「パウロの身体」は提供されていくであろう。